としょかんだより

2020年3月号
【号外】
編集・発行
天童市立図書館

地元企業ひとつぼ展示

吉田木芸（もくげい）

天童市の企業をもっと知ってもらおうと、天童商工会議所や企業に協力をいただいて、商品や材料・説明パネルなどと一緒に、関連する本を約一坪のスペースに展示しています。
今月紹介する企業は「吉田木芸」です。
展示期間は、3月1日（日）から3月31日（火）までですので、この機会にぜひご覧ください。

天童市柏木町にある吉田木芸。建物のまわりには、たくさんの木材が置いてあります。

父の吉田宏介氏と息子の宏信氏が、黒柿（くろがき）などの銘木を素材にして、茶道具や小引出、将棋駒箱や駒台（↓写真）など、伝統の技法によって貴重な工芸品を製作しています。父の宏介氏は、平成25年に「現代の名工※」に選ばれました。

黒柿工芸品の駒箱は、天童市のふるさと納税の返戻品にも選ばれています（寄付金額10万円以上）。

同じものが二つとない黒柿の逸品と、関連する本を展示します。

※現代の名工とは…

「卓越した技能者表彰制度」において、厚生労働大臣が表彰する「卓越した技能者」の通称です。都道府県知事や全国的な規模の事業を行う事業者団体などが推薦した候補者を技能者表彰審査委員が審査し、厚生労働大臣が表彰者を決定します。

（厚生労働省ホームページ）

黒柿とは、樹齢150年を超える「柿」の古木のうち、限られた条件によって、幹の内部に黒緑色あるいは黒褐色の模様を生じる木があり、これを黒柿といいます。主に東北と中部、中国地方の一部に黒柿の発生がみられますが、その材質・美しさ・品格において、最も上質なのが山形県を中心とする東北の一部地域に残る″大柿（おがき）″、″蓑柿（みのがき）″といった″昔柿（むかしがき）″の黒柿材です。環境の変化により、こうした「美材」「良材」は激減しています。

黒柿は古来より、その雅味あふれる模様が珍重され、正倉院御物の中にも多く残っています。展示している正倉院の本にも、写真が載っていますのでぜひご覧ください。

美しい模様ばかりでなく「材」としても優れた特性を持っていて、ち密な木肌と刃物通りの良さは特筆に価しますが、その特性を十分引き出すためには、高度な管理と忍耐を要します。これも黒柿の特徴で、黒く発色した部分と本来の白さを保った部分の含水率や乾燥速度の差など、「性（しょう）」の違いによるものです。そのため、ひとつでも多くの作品をつくりたいと速成に管理をした黒柿は、本来持つべき美しい色や木肌を失ってしまいます。黒柿が高価なのは、資源の少なさに加え、管理の困難さと避けられない歩留まりの悪さが大きな要因なのです。

黒柿を加工するには、まず丸太を屋外で約一年間乾燥させてから、板に製材します。その後「桟積み（さんづみ）」にして屋内乾燥させます。その期間はおよそ10年間！定期的に上下を積み替えたり、カビを取り除いたり、とても手間がかかります。

「仕口」（組立てるための加工）を作って組立てます。左の写真は、隠し蟻（かくしあり）ほぞの加工をしているところです。出来上がった作品には、黒柿の模様を引き立たせるように「漆」を摺りこんで仕上げます。

図書館では柿や木工、将棋など関連する本の展示や貸出、今月開催される仙台藤崎での父子展のパンフレットを配布しています。木目ではない黒柿の美しい模様を堪能しませんか。